

# 学内広報

2019.7.25

no.1524



本郷・アントレプレナーラボの2階ラウンジ



## 東大基金がクラウドファンディングのプラットフォームに!!

志ある卓越。  東京大学  
THE UNIVERSITY OF TOKYO

### TSCPに関するQ&A

# 東大基金が、やりたいことはあるのに資金がない 若手研究者や職員に朗報です

## クラウドファンディングのプラットフォームに!!



プロジェクトを選んでClickすると...



**支援の額や件数をリアルタイム表示**  
プロジェクトごとの寄付総額、寄付件数、継続寄付会員の数を公開。情報は随時更新されていくので、プロジェクト支援の進展度合いがほぼリアルタイムで把握できます。各ページに設置したボタンから状況を簡単にSNSで拡散することもできます。

**寄付の特典を金額ごとに段階表示**  
寄付金額に応じて設定する支援者向けの特典を表示します。寄付型プラットフォームなので商行為になる派手な見返りはNGですが、支援者への感謝の意を表す大事な項目です。

**寄付者からの応援コメントを表示**  
支援者からのメッセージをプロジェクトごとに閲覧できます。リアルタイムで表示されるコメントは大きな励みになります。

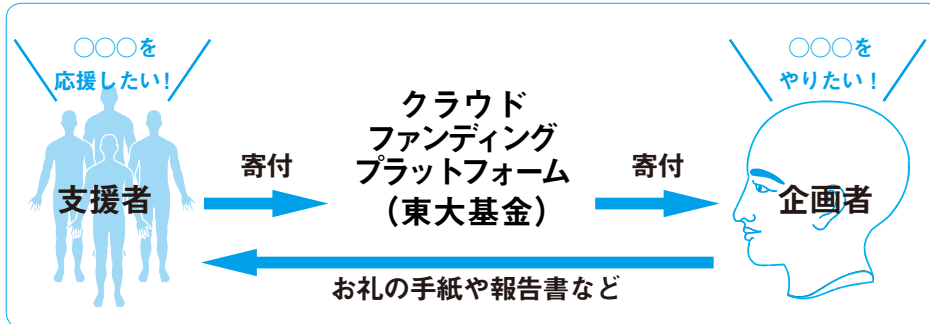
プロジェクトごとにページが設けられているのは従来の東大基金サイトと実は同じ。大きく違うのは、寄付額と寄付件数をリアルタイムで反映して表示するようになったことです（一般的なクラウドファンディングサイトと違い、支援期間は長く、目標金額の表示はありません）。SNSなどを使った呼びかけの効果がひと目でダイレクトにわかるのは、やはりクラウドファンディングの醍醐味です。そして、トップ画面では、支援が活発なプロジェクトほど先に表示されることになります（その順番の反映ももちろんリアルタイム）。支援の呼びかけ方や、活動報告ページで頻繁にプロジェクトの経過を発表することも、成功の大きな要因となるでしょう。



※ウェブサイト画像はサンプルです

この夏、東大基金のサイトが大幅リニューアルを果たしました。一番のポイントは、40を越える基金プロジェクトの全てにクラウドファンディング機能を搭載したこと。東大基金全体がクラウドファンディングのプラットフォームとなったのです。支援者としての活用はもちろんですが、実はこれは、何かやりたいことをあたためている教職員にとっては非常に使いがいがあるリニューアルです。サイトはどう変身したのか。そして東大におけるクラウドファンディングの姿とはどんなものなのか。ご確認ください。

## そもそもクラウドファンディングとは？



クラウドファンディング (Crowd Funding) は、特定の組織や個人ではなく、不特定多数に向けて自分のやりたいことを宣言し、複数の賛同者から小口の支援金を集めて目標の資金を調達するという方法。支援者と企画者の間に商取引が発生する「購入型」と、支援が税制上の寄付になる「寄付型」に大別され、東大基金は後者に該当します。やりたいことを宣言して支援を募るプラットフォームとして多数のクラウドファンディングサイトが運営されており、寄付型として始まったJapanGiving、購入型として始まったReadyfor、学術企画に特化したacademist、地域密着型のFAAVOなどが人気を集めています。東大基金はこうした既存のサイトとの連携ではなく自らプラットフォームとなる道を歩み始めました。

## 大学でもすでにいろいろな事例が！



### 「ロボコン」世界王者になるための資金を募ったら64人から計74万円が！

#### 東京大学ロボコンサークル RoboTech 支援基金

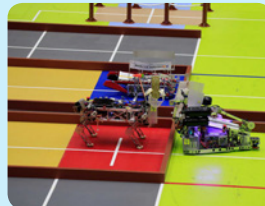
提示された課題の克服を自作ロボットで競う「ロボコン」。そのロボット製作には年に約600万円が必要です。工学部の支援金や企業様にいただく協賛金のほか、約80人の部員の部費で回していますが、部費捻出用のバイトのせいで活動時間を減らす部員も多く、世界一を目指すには心許ない状況でした。そんなときに東大出身の寄附者の方に教えられたのがacademistです。顧問の國吉康夫先生と相談し、目標を50万円として始めました。初の試みでしたが、40日間で64人の方から計741,200円の支援金が集まりました。世界大会では残念ながら優勝を逃したのですが、多くの人の応援を実感できる貴重な時間を味わえました。

ただ運用はハードでした。オリジナルTシャツ、イベント参加券、競技で使うシャトルコック型の特製グッズと、支援者へのリターンの準備が大変だったんです。初めてなのでがんばりすぎた面もありますが、気づいたのは支援者の多くがSNSに親しむ若い人だったこと。NHKが放映するロボコンはシニアの支持も高いんですが、そこには届かないように感じました。

そう感じた頃に東大基金がクラウドファンディング機能を導入すると聞き、参加を決めました。東大基金だと購入型でなく寄付型なので、リターンをがんばらなくていい。支援者が寄付金控除を受けられるのも重要です。東大が組織としてやっているという信頼感も大きい。もちろん、黙って支援が集まるとは思いません。ロボットを作る環境を努力して作るのもロボコンの一環だと捉えています。国策で巨額の資金を受けているような海外チームには負けたくないんです。次回2020年大会で2005年以来の世界一になれるよう、ご支援をお待ちしています。



RoboTech  
2018 年度部長  
河村洋一郎さん  
(工学部4年)



5月26日に開催の「NHK学生ロボコン2019」では、最速記録を出すも準決勝で破れ、世界大会に進めず。来年こそ世界一へ！

クラウドファンディングを大学の研究・教育活動に役立てようとする動きは、近年日本各地で盛んになっています。

研究費獲得に特化した上述のacademistがスタートしたのは2014年。様々な研究機関の研究者が利用しており、東大の大学院生が活用した事例も見られます。そのプロジェクトページには、研究費用を集めたいという希望だけでなく、自分の研究分野を広報したいという思いが強かったことが記されていました。Readyforでは、大学ごとの特設ページを用意して支援を募るReadyfor Collegeを2017年に開始。これまでに筑波大学、東京藝術大学、名古屋大学、九州大学、大阪大学のページができており、各大学のページでは総長・学長が支援を促すメッセージを発信しています。また、上述のFAAVOと同じ会社が運営するCAMPFIREには、近畿大学と法政大学が特設ページを設けています。一方、自ら一般社団法人を立ち上げてクラウドファンディング・プラットフォーム「OTSUCLE」を運営しているのが、徳島大学です。県内の他大学や企業も巻き込んだ形で、自らの研究活動だけでなく地域全体の活性化に取り組んでいます。もちろん、RoboTechのように、運動部やサークルなどの学生団体が個別にクラウドファンディングで資金を集めて成功した例は数知れず見受けられます。成功にはやる気と努力が絶対に必要ですが、クラウドファンディングの可能性は巨大。次に東大基金で成功事例となるのは、これを読んでいる皆さんかもしれません。

## クラウドファンディングの研究者に聞きました

### “crowd-supported science”とは?

学術のクラウドファンディング（以後、Academic crowdfunding, ACF）は科学技術社会論が注目をする「誰がどのように科学を決めるのか」、という点において従来科学と違うことから、興味深い研究対象です。従来科学は予算申請時に審査があり、それを通して予算を獲得、研究を実施、論文審査、発表という流れがあります。それに対してACFでは、審査はなく小口の寄付をネット上の不特定多数の方から受け取り、論文発表への圧力もありません。当然、アピールする内容も一般的に受ける内容になり、通常科学と異なることも予想されます。

我々はこうしたACFによって生まれる科学を“crowd-supported science”と名づけ（ikkatai, 2018）その特徴を予算獲得

時にbudget communityによるピアレビューを受けないことと整理しました。しかしピアレビューがないことへの不安は社会側にあり、一定のレビューシステムが必要です。よく若手研究者によいのはと耳にしますが、若手はむしろきちんとレビューを受けられる従来予算で訓練をしたほうがよいとも考えられます。

ACFに研究者が参加する目的は、もちろん予算獲得です。政府予算、共同研究、寄付が第1、第2、第3のファンディングならば、ACFは第4のファンディングと言うことができるでしょう（一方井, 2018）。さらに、参加研究者には科学を広めたいからという広報的要素があることにも注目をしています。

アピールビデオや準備は研究者側にも負担が大きいです。民間プラットフォームではこうしたサポートを充実させ、



Kavli IPMU / 情報学環 教授

### 横山広美

さらに支援額や目標金額に対しての到達率、残り日数などをウェブサイトに表示することで、立ち上がりを盛り上げ、SNSで広い層に波及させます。いずれも期限があるからできることであり、期限を設けない本学の場合、どのようにCF的な盛り上がりを作ることができるかがポイントになるでしょう。

## 東大基金のファンドレイザーにも聞きました

### SNSは成功の必須アイテムです

この10年でクラウドファンディングの認知度は向上しました。SNS等による支援の依頼に応じて実際に寄付をした経験をお持ちの方も増えています。国内最大規模のクラウドファンディング・プラットフォームをみると、規模や内容について様々なプロジェクトと募金活動が行われていることがわかります。一方、個別の目標金額に着目すれば、目標達成ばかりではなく未達のものも少なくありません。一体何が明暗を分けるのでしょうか。

この成功の秘訣を繙くために、クラウドファンディングの資金調達の仕事

説明します。そもそもクラウドファンディングは、インターネット上で多数の人から資金を募る仕組みですが、その実際は、寄附額のうち3分の1は直接の知り合い、3分の1は知り合いの知り合い、残りの3分の1が口コミで広がった大衆支援者からと言われています。そのため、プロジェクト開始1週間で目標金額の3分の1を集められるかどうか、その準備ができるかが募金活動成功の鍵となります。そしてこの仕組みを支える背景にはFacebookやTwitterといったSNSの活用が欠かせません。まずはSNSのアカウントを開設し、フォロワー（＝ファン）を増やし、知り合いに協力をお願いし、知



渉外活動支援課 エキスパート

### 齋藤 智

り合いの知り合いにも拡散してもらおう。このオーソドックスな手法がクラウドファンディングの王道です。ご興味のある方は、お気軽にご相談ください。

問い合わせ：東京大学基金事務局  
03-5841-1217 kikin.adm@gs.mail.u-tokyo.ac.jp

### (参考) 東大基金プロジェクト別支援実績 (オンライン寄付)

オンラインの申し込みをプロジェクト別に集計すると右表のようになりました（期間：2018年4月1日～2019年3月31日）。野球部、漕艇部、総務部と運動会のプロジェクトが3つ入り、根強い支持が窺えます。研究系では量子コンピューターとIPMUに人気が集。中央食堂、山上会館、図書館と由緒ある施設の改修事業も3つ登場。経済的な困難を抱える学生を支援する基金、教職員からの寄附を元に始まった留学生基金は、累計は多くないものの件数が特筆もの。今後はプロジェクト別の申込状況がリアルタイムで東大基金サイトに表示されます。

	件数	累計金額
1 硬式野球部支援基金	446	5,301,000
2 量子コンピューター研究支援基金	330	1,040,000
3 日本発アインシュタイン：数物連携宇宙研究機構（IPMU）	168	8,061,716
4 漕艇部支援基金	150	3,931,720
5 中央食堂リニューアル事業（東京大学創設140周年記念）	127	5,558,000
6 山上会館リノベーション事業（東京大学創設140周年記念）	119	5,825,000
7 修学支援事業基金	117	3,196,726
8 新図書館「アカデミック・コモンズ」計画	75	9,269,500
9 外国人留学生支援基金	66	113,000
10 総務部支援基金	65	140,000

# 報告書を 読まなくても わかっちゃう!? TSCPに関するQ&A

東京大学サステナブルキャンパスプロジェクト(TSCP)の新しい報告書がまとまりました。「やべー、知ってたけどまだ目を通してないや……」というあなたのために、その中から基本的な部分だけを抽出してQ&A形式でお届けします。

## TSCPってそもそも何?

Todai Sustainable Campus Projectの略称です。2008年、キャンパスからサステナブルな社会モデルを示すことを目的に始動しました。最優先課題として取り組んでいるのは低炭素化です。東大は都内でCO<sub>2</sub>排出量が最も多い事業所であり、研究活動を推進しながら低炭素化に貢献するのは社会的責任であるといえます。

## どんな目標を立てて進めているの?

当初より長期目標として、CO<sub>2</sub>排出量を2030年度に先端の実験設備等を除いて2006年度比50%に削減する「TSCP2030」を立てています。これを達成するために、図1に示すように短期目標として2012年度に実験系を除いて15%削減する「TSCP2012」、中期目標として2017年度に先端の実験設備を除いて5%削減する「TSCP2017」を定め、達成しています。現在は、パリ協定達成も考慮して図2に示すように新しい中期目標「TSCP2023」に向けて活動しています。

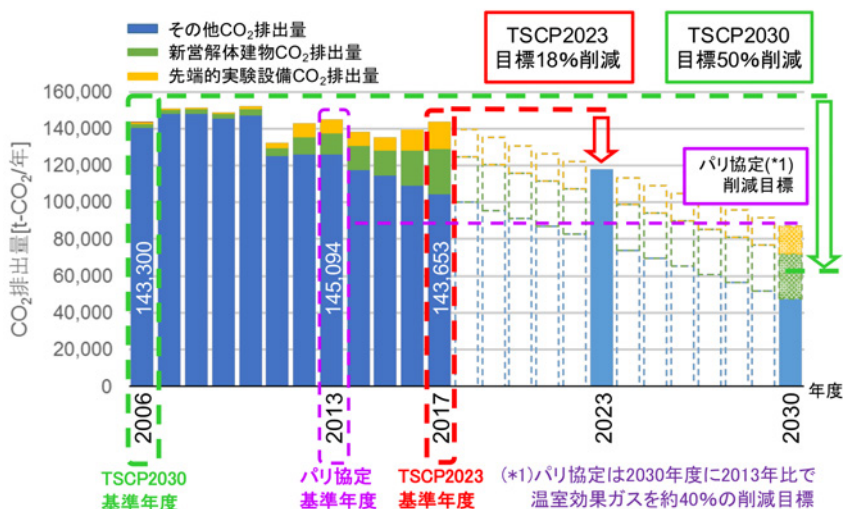


図2 CO<sub>2</sub>排出量の推移と今後の目標

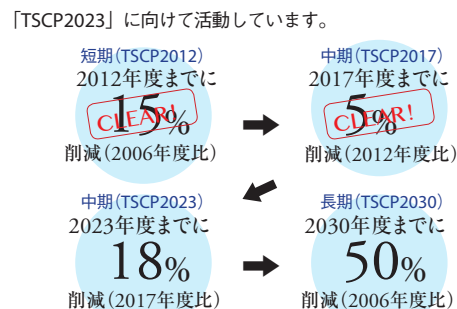


図1 CO<sub>2</sub>排出量削減目標

## 今までにどんな対策をやってきたの?

ハード面では、投資対効果の高い設備の更新をしてきました。ソフト面では、各部局との情報交換を行うとともに、他プロジェクトと連携して大学HPから全学の電力使用量を確認できる見える化を整備してきました(図4)。このほかにも、省CO<sub>2</sub>意識を高める啓発活動を行ってきました(図5)。

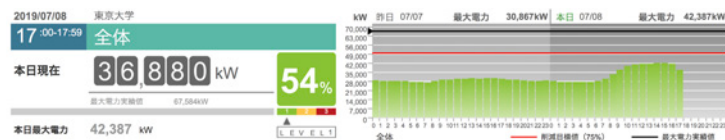


図4 全学の電力の見える化



図5 SHUT THE SASHステッカー

## 今後はどんな対策を進めるの?

今年度より照明のLED化を5年間の予定で重点的に進めます。また、「TSCP2030」の達成に向けてエネルギーを多く消費する実験系のより一層の対策を進めます。今後も大学運営や研究等で「必要なエネルギーは使うが、無駄なエネルギーは使わない」という考えのもと活動を進めていきます。

## 成果はどれくらいなの?

2006年度を基準に先端の実験設備を除いたCO<sub>2</sub>排出量の推移を図3に示します。2006年度を基準100としたところ、2017年度は面積換算で83.9、経常収益換算で71.2となっています。大学全体の延床面積は増え、アクティビティも上がっていますが、TSCPの取組や皆様のご理解ご協力により、その増え方に比べCO<sub>2</sub>排出量の増加を抑えることができています。

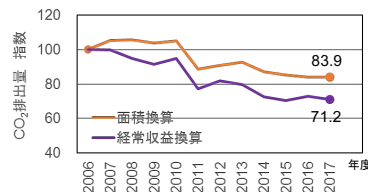


図3 TSCPの取り組みの成果

## 活動費用はどうしているの?

各部局から前年の光熱水料の4%をいただいて運営しています。

## どんな人が活動を推進しているの?

施設企画課TSCPチームの職員4人が担当しています。また、2015年設立の学生委員会があり、環境問題への関心が高い15人程度の学部生・院生が、環境を考えるキャンパスツアー、エコプロへの出展等の活動を行っています(図6)。図7は本郷キャンパスのマップ上に各建物のCO<sub>2</sub>排出量密度(t-CO<sub>2</sub>/m<sup>2</sup>)を表した模型で、エコプロのイベントで発表しました。



図6 TSCP学生委員会

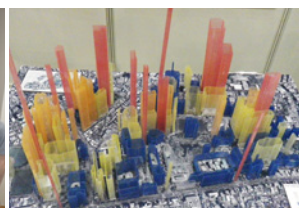


図7 CO<sub>2</sub>排出量密度の模型

★報告書はこちらから読めます→ <https://www.ut-portal.u-tokyo.ac.jp/file/index.php/会議資料/科所長会議/31年度/元.05.14/>

教養教育の現場から

第34回

## リベラル・アーツの風

創立以来、東京大学が全学をあげて推進してきたリベラル・アーツ教育。その実践を担う現場では、いま、次々に新しい取り組みが始まっています。この隔月連載のコラムでは、本学のすべての構成員がぜひ知っておくべき教養教育の最前線の姿を、現場にいる推進者の皆さんへの取材でお届けします。

## リベラル・アーツとオープンイノベーション

／産官学コンソーシアム「サステナブル未来社会創造プラットフォーム」

お話／環境エネルギー科学特別部門長 教授 瀬川浩司



## エネルギーを機軸にして

——産官学でエネルギーを基軸に未来社会をデザインするオープンイノベーションの取組みがどうですか。

「はい。私の研究は太陽電池や再生可能エネルギーですが、パナソニックを中心としてエネルギー領域の事業を行う企業や政府関係者が集まり、産学協創推進本部が事務局となって昨年2月から勉強会を重ねてきました。そのなかで、未来社会の具体的なデザインなしにはエネルギーのマネジメントなど考えられない、という共通認識に至りました。分野を超えた取り組みで、リベラルアーツ的センスが求められるわけです。このため、建設、鉄道、自動車、エネルギーインフラ、商社、など業種をこえた企業や地方自治体にも声をかけ、昨年秋から産官学にまたがる形に広げ、産学連携の点から先端科学技術研究センター内に正式に産官学コンソーシアム事務局を置くことになりました。KOMEXの環境エネルギー科学特別部門が運営主体となります」

——勉強会とは何が違うのですか。

「議論や意見交換で終わるのではなく、実際のアクションにつなげたいという思いが強いです。企業の皆様には事業のノウハウを、自治体の皆様には実証の場をご提供いただき、段階的に検証を進めながらサステナブル社会の実現に少しでも貢献したい。そのための仕組みとして選んだ形がコンソーシアムです。重点課題として、日本のエネルギーシステムのあるべき姿の追究と地域創生を機軸とした日本のあるべき姿の追究の2つを掲げました。賛同企業の皆様から年会費を集め、原資とします。基本はオープンイノベーションですが、知的財産権が発生した場合は発案者に帰属することを明記し、企業から参画しやすくしています」

——6月26日にはコンソーシアムの準備会合がありましたね。

「この会合は7回目の勉強会も兼ねています。今回のテーマは「地方創成とエネルギー」ですが、第一部では、内閣府地方創生推進事務局の村上敬亮審議官をお招きし、「地方創生とsuper city」の題で講演いただきました。給与を首都圏と同等にすれば地方経済はすぐ活性化する、

今後は地域の生産者が生産物の価値を説明できなければいけない、社会的課題の言語化が足りない、地方創生は4年目の死の谷を乗り越えることが重要……。様々な気づきを与えていただくお話でした」

## 2024年度までに社会実装を

「第二部では、地域未来社会連携研究機構長の松原宏先生と、先端研で地域共創リビングラボを展開している小泉秀樹先生に講演いただきました。松原先生は、学内で個々に進んできた地域社会連携の活動をつなげるためにできた機構の概要と、機構としての活動が進む三重や北陸での事例を紹介されました。小泉先生は、市民と自治体と企業と大学が連携して地域の課題解決を実践するリビングラボの概要と、先端研がいわき市や小布施町などで進めているリビングラボの事例について紹介されました。地域創生について、コンソーシアムが重点課題として取り組む際の重要な視座をご提供いただきました」

——今後どんな展開を考えていますか。

「今年度は現状把握と課題抽出に重きを置き、2020年度に実行計画を定めて準備を進め、2021年度に小規模実証を実施、2023年度に中規模実証、2024年度に評価・まとめを、と考えています。8月まではオープン参加の期間を設け、その後は会員登録していただいた皆様と活動を進めます。8月27日には「次世代通信5Gとエネルギー」をテーマにしたシンポジウムを、11月にはSDGsをテーマにしたシンポジウムも予定しています。私たちの今後の活動にご期待ください」



①6月26日の会の模様。エネルギー、建設、電鉄、自動車、化学など様々な業種から約40人が参加しました。  
②開会挨拶を行うパナソニックの清水敦志プロジェクトマネージャー。③これまでの取組みを報告するパナソニックの東和司主務。④村上敬亮審議官。⑤松原宏総合文化教授。⑥小泉秀樹先端研教授。

# 部局長だより 第1回

～UTokyo 3.0 を導くリーダーたちの横顔～



法学部・医学部編

## 法学徒として学ぶ魅力を伝えたい

法学部は2017年度進学生から新カリキュラムと新コース制を導入し、この3月に最初の卒業生を出すことができました。進路の多様化を見越し、必修科目を減らし学生が主体的に学べるようにというこの改革を、軌道に乗せたいですね。

大学院の総合法政専攻では、2017年度に始めた先端ビジネスロー国際卓越大学院教育プログラムが3年目を迎え、よりきめ細やかな教育が可能になりました。ここでは理系分野との学際融合も大きな特徴です。AIや自動運転を筆頭に、先端技術を社会に実装する場合には必ず法的な問題が生じ、その解決こそがビジネスを駆動します。先端技術の話を理解できることは現代の法学徒に必須となりつつあると感じます。

法科大学院では、近年、在学中に司法試験予備試験に合格して退学する学生が増えています。優秀な学生たちの予備試験偏重の風潮に対しては、法科大学院での学修は予備試験より価値がある、と私は声を大にして叫びたい。第一線で活躍する実務系法律家から対面で学び、様々な背景を持つ仲間と議論することは、人と向き合い、人の痛みを引き受ける法曹にとって非常に大切な過程なのです。政府による制度改革に対応しつつ、こうした価値をわかりやすく若者に伝えることが在任中の大きな課題だと捉えています。



法学政治学研究科・法学部長  
大澤 裕 趣味: 学生スポーツ観戦

## 病院地区のインフラが整ってきました

施設の面では、入院棟B、クリニカルリサーチセンターA棟、南研究棟と、病院地区の再開発が進んでいます。南研究棟は産学連携や福利厚生機能を持つ施設に生まれ変わりました。臨床講堂を「鉄門臨床講堂」として再建し、「健康と医学の博物館」も入りました。研究を飛躍させるインフラが整いつつあります。個別の研究以外では、ニューロインテリジェンス国際研究機構の発足が最近では非常に大きなトピックでした。

近年、医学教育は知識を「覚える」から「使いこなす」へと舵を切っています。学生は基礎知識を問うCBT\*の「共用試験」と客観的臨床能力試験OSCE(オスキー)の両方に合格してから参加型臨床実習に進みます。2020年からはOSCEを2回行うようにもなります。以前とは随分様変わりしました。

医学部では医師免許のための必須科目の多さが特徴ですが、教育を担う教員が年々減っているのは大きな課題です。160年という長い歴史を持つ部局では、教授会のやり方一つ取っても、制度疲労が生じている面があります。新任ならではのフレッシュな目で運営の体制を見直したいと思っています。

医学部長として教職員の皆さんにお勧めしたいのは、新しくなった入院棟Bの予防医学センターで日帰り受診ができる人間ドックです。私も試してみましたが、非常に快適ですよ。



医学系研究科・医学部長  
齊藤 延人 趣味: 手術検討

# 東大アラムナイ通信

卒業生と大学をつなげるプラットフォーム

第2回

社会連携本部  
卒業生部門 福味和子

## 力強い校友会サポーターの存在

卒業生部門では、IARU\*加盟校(東京大学、オーストラリア国立大学、シンガポール国立大学、北京大学、ETH、UCバークレー、ケンブリッジ大学、オックスフォード大学、イエール大学、コペンハーゲン大学、ケープタウン大学)の卒業生担当が互いの活動と課題から学び合うIARU Alumni Associations Summitに参加していますが、ここでひととき存在感を放っているのが欧米の大学です。

とりわけ、イエール大学では、5千名規模の卒業生ボランティアが在学学生を支援する体制が確立されており、卒業すると今度は自分が卒業生として在学学生を支援する側に回る、という好循環が存在しています。この仕組みを東大でも実現させるべく、2017年4月「東京大学校友会サポーター」(<https://www.u-tokyo.ac.jp/ja/alumni/contribution-programs/supporter.html>)制度をスタートさせました。2019年7月現在、登録者数は80名で、年代は20代から60代までと幅広く、職種も官公庁から銀行、コンサル、商社、ベンチャーなど様々。文系、理系比率は約2:1、女性比率は20%です。

この年代もバックグラウンドも多様な卒業生をつなぐキーワードが、「恩返し」と「学生支援」です。サポーターの方には、卒業生部門のスタッフが面談させていただくのですが、面談に見えた卒業生が異口同音に仰ることが「大学にお世話になったので、恩返しをしたい」「自分の経験やスキルを学生支援に活かしたい」ということです。卒業生の大学への貢献の形は、「時間」「キャリアスキルや経験」「ご寄附」の三つに大別されますが、私達が活用しているのは、主にこの「時間」と「キャリアスキルや経験」の部分です。

「入学生歓迎パーティ」のホスト役、「就活面接演習」の面接官役などが活躍の場ですが、プログラムの実施にあたっては、学内の各部署のご協力が不可欠で駒場の先生方やキャリアサポート室と緊密に連携しています。当初は年二回だった募集も現在は通年となり、今年度中には三桁の登録数が見込まれます。

今後の課題は、東京近郊のサポーターしか参加できない「地域限定型」企画に加え、居住地を問わず活躍できる新企画の立ち上げです。

規模も活躍の場も広がりつつある校友会サポーター。今後の彼らの動きにご注目ください。



校友会サポーターの皆さん

東大アラムナイ [www.u-tokyo.ac.jp/ja/alumni/](http://www.u-tokyo.ac.jp/ja/alumni/)

\*CBT: Computer Based Testing

\*International Alliance of Research Universities (国際研究型大学連合)

## ワタシのオシゴト 第159回

RELAY COLUMN

教養学部等教務課国際化推進係 係長 林 貴子

## PEAK &amp; GPEAK・世界の窓口から



駒場アドミニ棟1階に窓口があります

英語による学位プログラム PEAK (学士) と GPEAK (修士・博士) の教務を担当しています。前期課程から博士課程までの学生をトータルにケアする、教務系でも (おそらく) 全学唯一のセクションです。

PEAK & GPEAKは海外からの受入れと送出しがメインのコースなので、本学の国際化に関するポリシーの影響を強く受けます。係の全員が海外での生活経験を持っていることもあり、業務を通じて否が応でも東大、ひいては日本の来し方行く末を考える毎日です。

また、新しいプログラムがゆえに、前例のない・周囲に理解されづらい問題にぶち当たることもあります。が、なんとなくみんな明るく仕事ができているのは、見知らぬ土地で地団駄を踏んだり、見返りを求めず親切にしてもらったり、そんな経験が根っこにあるからかなと思います。

真面目な話をしましたが、プライベートでリラックスできるのは、墳子 (ふんこ) として活動する時間です。古墳にすっかり魅せられて、測量図を広げたり、遠くは韓国まで探訪したり……。時間や空間の縛りを忘れられるひとときです。



稲荷山古墳のPEAKから將軍山古墳を望む

得意ワザ：雰囲気古墳があることが分かる

自分の性格：まるいけどこだわりのある帆立貝形

次回執筆者のご指名：佐藤寛也さん

次回執筆者との関係：大学院 (大学経営・政策) の後輩

次回執筆者の紹介：熱いオシゴトぶりを尊敬してます

## デジタル万華鏡

東大の多様な「学術資産」を再確認しよう



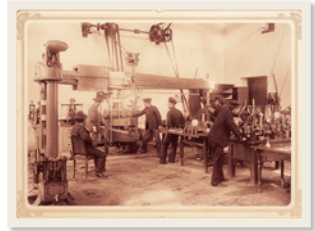
第3回

附属図書館情報サービス課 主査 守屋文葉

## 明治期の東京・パリにタイムスリップ

今回より、「東京大学学術資産等アーカイブズポータル」から検索できる学内秘蔵のお宝を順にご案内します。まずは総合図書館所蔵資料から2種類ご紹介。

初めに、写真帖『東京帝國大學』。明治期の東京帝国大学を撮影した2点の写真集で、明治33 (1900) 年のものはパリ万国



明治37年「写真帖」から 工学実験所試験室

博覧会、明治37

(1904) 年のものはセントルイス万国博覧会に出品されました。当時の総長をはじめとする教授たちの肖像や校舎・設備の写真が収録されています。中には撮影を意識してか、スーツにハット、学ランに角帽姿で実験をしている姿も。高精細画像のおかげで、小さな器具までよく見え、昔の東大に関する新しい発見があるかもしれません。「写真帖」は、ポータルのトップページに設けた電子展示の「東京大学を知る」というカテゴリからすぐアクセスできます。

続いては、田中芳男文庫所収『外国摺拾帖』(全5冊)。幕末・明治期に役人として活躍した田中芳男は日本の博物館創設に尽力した人物としても知られています。彼が収集した大量の商品ラベルなどを貼り付けた『摺拾帖』は以前本誌でも紹介されたのでご存知の方もいるのではないのでしょうか。『外国摺拾帖』は、雑多なものを貼り交ぜている点は『摺拾帖』と同じですが、その名のおり田中が外国 (仏、墺、米) の万国博覧会を視察した際の収集物が綴られています。例えば第2冊には、1867年パリ万博の会場案内図や入場券などが貼り込まれ、万博の臨場感が伝わってきます。



『外国摺拾帖』から パリ万博入場券

またホテルの朝食メニューや種のカatalogなどが所狭しと貼られており、博物館創設に向

け西洋の情報を貪欲に吸収しようとしていた田中の意気込みが感じ取れます。

ぜひデジタルでご覧いただき、在りし日の東京やパリにタイムスリップしてみてください。

東京大学学術資産等アーカイブズポータル  
<https://da.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/portal/>



# インタープリターズ・第144回 バイブル

医学系研究科講師 孫 大輔  
科学技術インタープリター養成部門

## 映画とダイアログ

映画にはいつも「対話（ダイアログ）」がある。それは人が「物語る」存在だからである。映画がどれほど高技術・高予算になるうとも、ストーリーの核となり心をゆさぶるのは登場人物（たち）の語り、すなわちダイアログである。

皆さんは好きな映画の名場面として、どのようなシーンを思い浮かべるだろうか。そこに出てくるダイアログは？ おそらく、とてもシンプルな言葉のやりとりと、情感たっぷりの人物たちの表情や身ぶりではないだろうか。小説や演劇のダイアログと違い、映画のダイアログでは大げさな表現や直接的な心情のナレーションは必要ない。映像的表現がそれを埋め合わせるので、映画におけるダイアログは比較的さりげないものとなる。アメリカの脚本家ロバート・マッキーは、その著書の中で、映画のダイアログの機能を、①明瞭化、②性格描写、③アクションの三つに集約している。つまり、人物たちの対話によって、物語や人物の性格が明瞭化され、場面が動いていく。

映画は何よりも楽しいものである。しかも、娯楽としての要素だけではなく、教育的効果や総合芸術としての側面もある。筆者は、地域における健康プロジェクト（谷根千まちばの健康プロジェクト：まちけん）において、昨年25分の短編映画を製作した。『下街ろまん』と題したその映画は、谷中・根津・千駄木という下街を舞台として、うつ病の青年が人々とのつながりによって健康を回復していく過程を描いた作品である。この映画も過剰な演出やナレーションは避け、人物たちのダイアログを中心に描いている。この映画を作る過程で、日常的な「なにげない」ダイアログが、いかに力強く人を勇気付け、トータルな健康（ウェルビーイング）を回復させるのかをあらためて実感した。みなさんも、映画のダイアログの機能に注目してみてください。



『下街ろまん』の一場面

科学技術インタープリター養成プログラム

専門知と地域をつなぐ架け橋に

# FSレポート!

第1回

教育学研究科教授 小玉重夫

## 第3期FSプログラム開始

「フィールドスタディ型政策協働プログラム（FS）」というプログラムについて、今まで耳にしたことはあるでしょうか。社会が大きな転換期にある今、多様な関係者と協働しながら、政策を立案・実行できる人材の育成は日本社会の喫緊の課題です。FSはその要請を受け、社会的課題に果敢にチャレンジするリーダー人材の育成を目指し、2017年にスタートしました。

FSは、プログラム協力自治体から学生に、地域における課題を提示いただくことから始まります。学生はチームを組み、投げかけられた課題に対して事前調査や活動計画の立案等を行った後、地域の現場に入ります。そこで現状について身をもって体験・把握して大学へ戻り、課題解決に向け、自ら考え、または知見を有する学内の教職員等の協力を得て、その糸口を探ります。これらの事前調査、現地活動、事後調査を通じて、一年をかけて課題解決への道筋提案を行います。



自治体の方々と打ち合わせ。

道筋提案が大きな目標ですが、学生の活動が地域の課題解決の一助になること、そして、本学の専門知と地域を繋ぐ架け橋となることにも期待しています。

本年度は、11県（青森、山形、石川、福井、長野、三重、鳥取、島根、高知、宮崎、鹿児島）15地域の課題について、学生が取り組んでいます。夏の現地活動前ワークショップにおける自治体の方々との打合せでは、第1期、第2期のOB・OG学生も交え、担当の方から地域の現状を聞き、課題の内容について深掘りするなど、遅くまで熱心な議論が交わされました。



担当教員とのディスカッション。

また、FSは各県毎に担当教員が3名おり、学生の活動をサポートしています。教員とのディスカッションによって、自分たちだけでは気付かなか

った課題解決のヒントを見つけた学生も居たようです。

現在学生達は、夏の現地活動に向けて計画を詰めています。その成果については、次回ご紹介いたします。

フィールドスタディ型政策協働プログラム  
www.u-tokyo.ac.jp/ja/students/special-activities/h002.html

**トピックス** 全学ホームページの「UTokyo FOCUS」(Features,Articles)に掲載された情報の一覧と、そのいくつかをCLOSE UPとして紹介します。

掲載日	担当部署	タイトル (一部省略している場合があります)
6月11日	本部広報課	淡青色の注目アーティストたち 切り絵童話の鷲津影織 / 広報誌「淡青」38号
6月11日	薬学系研究科・薬学部	人工知能を用いたヒトiPS由来細胞培養の品質管理法の開発
6月12日	本部経営戦略課	「Society 5.0 for SDGs」の実現に向けた経団連・東京大学・GPIFの共同研究開始について
6月12日	本部学生支援課	平成30年度初年次長期自主活動プログラム(FLY Program)活動報告会等の開催
6月12日～7月10日	広報戦略本部、工学系研究科・工学部、医学系研究科・医学部、総合文化研究科・教養学部、医科学研究科、カブリ数物連携宇宙研究機構、教育学研究科・教育学部、東洋文化研究所、生産技術研究所、経済学研究科・経済学部	地域産業×科学技術×教育で種子島の課題を解決   足立区と東大の「おいしい」関係   転ばぬ先のVRスロートレーニング   シエラレオネ、エボラ出血熱との戦い   女子の物理系学科進学をはばむ壁とは?   あらゆる学問は保育につながる   イスラームと性差別の問題を、さまざまな視点から   世界の川の流れをつかめ!   水をめぐるアジア史を、空間解析から読み解いていく / FSIプロジェクトシリーズ
6月13日～7月4日	広報戦略本部、教育学研究科・教育学部、先端科学技術研究センター、物性研究所、理学系研究科・理学部	自分探しの延長で始めた研究が、社会に蔓延する冷笑主義を打ち破る   世界初の量子ビット素子を実現   幻の素粒子「マヨラナ粒子」の手がかりを物質中で発見   化学合成の開拓者として、今までにない有用な物質を次々と創出 / UTOKYO VOICES
6月14日	グローバルキャンパス推進本部	第4回東京大学-清華大学 戦略的パートナーシップ合同シンポジウム @ 清華大学 "Joint Multidisciplinary Symposium"
6月14日	本部情報戦略課	【注意喚起】東京大学を装った迷惑メール(なりすまし)にご注意ください。
6月18日	総合文化研究科・教養学部	超域文化科学専攻の大西由紀助教が第51回日本演劇学会河竹賞奨励賞を受賞
6月24日	工学系研究科・工学部	局在する光でシリコンの高効率光吸収を実現
6月25日	新領域創成科学研究科	物質系専攻の有賀克彦教授がLangmuir Lectureship Awardを受賞
6月26日	本部学生支援課	B&W部久恒選手が世界クラシックパワーリフティング選手権大会で世界3位入賞、ジュニア部門トータル世界新記録更新、一般日本新記録更新
6月27日	本部総務課	令和元年度 秋季入学式について 令和元年度 秋季学位記授与式・卒業式について
6月28日	本部人事企画課	令和元年度名誉教授の称号授与
6月28日	本部広報課	広報センター夏期臨時休館のお知らせ
6月28日	本部国際戦略課	五神総長がより良い未来に向けたビジョンを世界に発信しました
7月3日	本部広報課	変化を先導する大学の役割   総長室だより～思いを伝える生声コラム～第23回
7月5日	総合文化研究科・教養学部	駒場Iキャンパス第1グラウンド改修記念式典
7月5日	薬学系研究科・薬学部	がん細胞毒性を有する1-ヒドロキシタキシニンの全合成に成功
7月5日	宇宙線研究所	ハイパーカミオカンデ計画に参加予定の12ヶ国の科学者、具体的な貢献について議論
7月9日	本部環境安全課	令和元年度「東京大学安全の日」講演会開催 第3回環境安全衛生スローガン募集実施報告
7月10日	本部管理課	2019年9月、目白台インターナショナルビレッジが誕生!



## CLOSE UP

### 「東京大学安全の日」講演会を開催

(本部環境安全課)



学内外からの参加者は約280名を数えました

7月2日、医学部教育研究棟鉄門記念講堂において、「大学における防火防災」をテーマに、令和元年度「東京大学安全の日」講演会を開催しました。本学では平成17年に発生した死亡事故を受けて7月4日を安全の日と定め、事故の風化防止と大学の安全レベルの継続的向上を目的に毎年講演会を開催しています。東京理科大学研究推進機構総合研究院の関澤愛教授が「大規模地震による火災への想定」の題で、

JXTG エネルギー株式会社環境安全部の渡辺哲氏が「米石油メジャーから学んだSH&Eの本質」の題で講演されました。本学環境安全本部からは大久保靖司教授と飯本武志教授も講演を行いました。また、「第3回環境安全衛生スローガン」の表彰式も行われ、総長賞には生命科学ネットワーク・新富美雪特任助教の「身を守る整理整頓心の余裕」が選ばれました。表彰後には受賞作が一覧できるポスターが配られました。

## 表紙について

附属病院地区の南研究棟内にある産学協創推進本部のインキュベーション施設・東京大学アント

レプレナーラボには、入居企業が使えるラウンジが4つあり、壁を3人の若手アーティストの作品が彩っています。表紙はその一つで、大槌の国際沿岸海洋研究センターの天井画で知られる大小島

真木さんの壁画がある2階南側の一室。バイオ実験室を擁する施設に生命感溢れる画風がマッチしています。入居企業と打ち合わせる機会がある際は是非お見逃しなく(一般公開はしていません)。



CLOSE UP

経団連、GPIFとの共同研究をスタート

(本部経営戦略課)



左から、GPIFの高橋理事長、経団連の國部副会長、本学の五神総長

6月10日、経団連（日本経済団体連合会）・東京大学・GPIF（年金積立金管理運用独立行政法人）は、「Society 5.0 for SDGs」の実現に向けて、「Society 5.0」と「ESG投資」とを結びつけるべく共同研究を行うことに合意し、大手町の経団連会館にて記者会見を行いました。経済界、学术界、投資家の3者が密に連携し、「『Society5.0の実現』と『ESG投資』が結び付き『SDGsの達成へ』とつなげる」共同研究を立ち上げるようになったものです。

会見には、経団連の國部毅副会長、本学の五神真総長、GPIFの高橋剛広理事長が顔を揃えました。五神総長は「本共同研究においては、経済界と投資家の連携に、多様な知とそれを生み出す人材が集積している大学が加わることで、「Society 5.0 for SDGs」に向けた明確な社会経済ビジョンを示し、その実現につながるイノベーション活動と資金循環の形成を加速させることができるものと期待しています」とコメントしました。



CLOSE UP

FLY Programの活動報告会等を開催

(本部学生支援課)



学生による活動報告

駒場キャンパス18号館ホールにて、平成30年度初年次長期自主活動プログラム（FLY Program）活動報告会が開催されました。五神総長及び森山大学執行役・副学長による挨拶の後、参加学生の活動報告が行われました。これまでと異なる価値観や生活様式に触れることで自身に対する見方に変化を感じる様子や、困難な課題に直面しながら主体的にそれを乗り越える様子が伝えられ、プログラムの活動で成長したことを感じさせるものでした。FLY Program推進委員会委員長の石井和之教授が総括を述べ、五神総長が修了証を授与した後、藤井理事・副

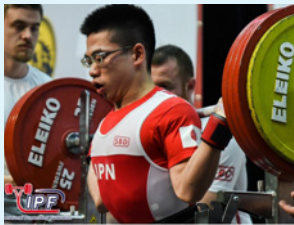
学長の挨拶をもって閉会となりました。引き続き、令和元年度プログラム参加学生（7期生）からの活動計画発表を主眼とした交流会が開催されました。運営委員会委員長の石原あえか教授及び太田教養学部長による挨拶の後、各学生から活動計画の発表があり、最後に運営委員会次期委員長の高橋哲教授から激励のメッセージが送られました。今年度の報告会及び交流会では、過去に活動を行った学生が司会進行を務めてくれるなど、プログラム運営を支援する側として参加してくれました。



CLOSE UP

B&W部の久恒選手が世界選手権で3位に

(本部学生支援課)



久恒選手の勇姿。好きな種目はスクワット、好きな筋肉は広背筋、好きな食べものはパフェだとか（B&Wホームページより）

6月4日～15日、スウェーデンのヘルシングボリでIPF世界クラシックパワーリフティング選手権大会2019が開催され、本学ボディビル&ウェイトリフティング部（B&W部）の学生が出場しました。一般男子59kg級に出場した久恒歩選手は、スクワット205kg（一般日本新記録）、ベンチプレス137.5kg（ジュニア日本新記録）、デッドリフト245kg（種目別第3位）の好成績で、トータルでも世界第3位、世界ジュニア新記録更新、一般日本新記録更新と堂々たる記録を残しました（ジュニアは23歳以下）。本大会は、ギアと呼ばれる硬い生地を着用し

ないノーギア部門で世界最高位の大会です。出場には全日本大会一般の部で優勝する必要があり、事実上、世界各国の一般の部における各階級王者が出場する極めてレベルの高い大会です。B&W部は、一回90分の練習を週3日行い、授業期間以外は完全オフという、極めて短い練習時間で活動しています。その中で、団体戦でも全日本学生選手権大会で総合3位に輝くなど目覚ましい成績を残しています。これは、B&W部が諸先輩からのノウハウを受け継ぎつつ、自らの頭で考え、質の高い練習を心掛けてきた成果といえます。今後の活躍にもご期待ください。



CLOSE UP

駒場第1グラウンドの改修記念式典を開催

(総合文化研究科・教養学部)



4×100mリレーには過去の箱根駅伝経験者チームも登場。雨の中、約230名の参加者で改修を祝いました。

6月22日、駒場キャンパス第1グラウンド改修記念式典を現地で行いました。第1グラウンドは、1994年に土のグラウンドから全天候舗装されましたが、それから20年以上がたち、走路表面の摩耗が進んで改修が必要な状況となっていました。そこで、陸上部のOBOG会である東大陸上運動倶楽部が、2015年から「第1グラウンド改修プロジェクト」を開始し、寄附を募りました。そして2018年までに、OBOG、部員のご両親や関係者から7800万円の寄附を集めることが

でき、大学からの費用負担も加えて改修を行えることになりました。今年4月末には日本陸連公認第4種競技場としての検定をパスし、改修が完成。今回の改修により、これまで曲走路が6レーンまでしか使えなかったのが、7レーンまで使えるようになりました。投擲ネットを新しくし、ハンマー投げや円盤投げを国際規格で行えるようにもなりました。式典には五神総長も参加し、エキシビジョンとして行われた100m走ではスターター役を務めていました。



## 役に立つ研究

今年の3月、私は自分の研究を一般の人々に説明する機会を得た。三重県の高校生が研究室見学に訪れたとき、女子高生が「この研究室は、どのような役に立つ研究を行っているのですか？」と質問した。また、知人の結婚披露宴で、隣に座った保険代理店員は、「船津さんは何の研究をしているのですか？その研究は私達にどのように役立っていますか？」と質問した。この『役に立つ』という言葉が印象に残った。研究の学術的な意義を滔々と説明しても、一般の人には分かりにくい。確かに、役に立つという観点で説明すれば、分かりやすくなるだろう。また、この質問から、一般の人々は、研究者に『役に立つ』研究を期待しているように思われた。

この『役に立つ』という言葉を別の状況でも聞いた。4月になると新人が研究室に配属される。私の研究室では新人実習を2週間ほど行い、どのような研究が行われているか？どのようなメンバーがいるか？を知っていただく。そして、研究テーマを決める相談をすることになる。その際に、学生に「どのような研究を希望しますか？」と質問すると、世の中の『役に立つ』研究をしたいと答える学生が少なからずいるのだ。特に、薬学部は、病気で苦しんでいる人々を助けたいなどの理由で進学する学生がいるので、このような希

望が出されることがある。一方、私は理工系の出身なので、自分のやりたい研究を『役に立つ』という観点から考えたことはなかった。このような学生のためには、がんの早期診断や環境問題など、『役に立ちそうな』研究テーマを提案する。

このような志向を持った学生に、細菌の遺伝子に含まれる特殊な反復配列の謎を解明しないかと提案することは難しいだろう。この如何にも『役に立ちそうもない』研究を行ったグループがいて、その結果、細菌がウイルスを排除する免疫機構の一種であるCRISPR/Cas9システムの機構が明らかになった。この発見により、人類はゲノム編集という『超・役に立ってしまう』技術を手に入れたのだ。自然界には人間の想像を超えた現象と新たな研究領域が残っており、好奇心にしたがって研究しないとその新領域に踏み込めないことがある。幸い、薬学部・薬学系研究科には、『役に立つ』研究にこだわらず、好奇心をもって研究を楽しむ学生も多い。どのような動機で研究を行うにせよ、一流の研究をすれば、最終的に『役に立ちそうだ』と私は思うのだが、皆さんはどのようにお考えだろうか？

船津高志  
(薬学系研究科)

